



ブリックアクセプトランスという言葉を使うようになったのは、前職の環境安全研究センターに着任した時からです。環境安全研究センターで行っている環境安全講習会の講師を行う際に、大学の廃棄物管理に関する基本原則の一つとしてパブリックアクセプトランスの重要性を説明しています。パブリックアクセプトランスは、「リスクを含む（あるいは含むとみなされる）活動は、たとえ科学や社会の進歩に貢献するものであったとしても、一般市民の合意を得なければ自由に行えない。」とされ、社会受容性を意味します。廃棄物処理施設、空港、原子力施設の建設などの周辺に環境的・社会的な影響を与える事柄について、住民の合意を得ることなどが具体例として挙げられますが、最近の話題としてドローンによる宅配についても該当すると思います。

新しい技術などを導入してパブリックアクセプトランスを得るには、実証実験を十分踏まえることが必要になります。柏キャンパスで自動運転によるシャトルバスの運用の実証実験が始まりましたが、実証実験を積むことで、

安全性の向上に向けた取り組みがなされて世の中に受け入れられていくことになるでしょう。

話は変わりますが、私が新領域に着任してからインドネシアの泥炭地から発生する二酸化炭素や有害物質の排出量推計の研究を始めました。最近、日本の新聞などでも記事になることがあります。熱帯泥炭地での火災によるヘイズ（煙害）についての研究です。これまで、研究室や観測所に測定装置を設置し環境計測をしたことはありましたが、海外での環境計測に加え、野外での実施は初めての経験でした。観測サイトに観測測器を設置するためには、ほぼ赤道直下の足場が悪い泥炭地を1時間ほど歩いて行く必要があります。荷物の運搬や建設を手伝ってもらうために雇った現地の方は苦も無く泥炭地をすたすたと歩いていくのですが、私はついていくのがやっとで日ごろの運動不足を痛感しました。そもそも、なぜ泥炭火災が最近頻発しているかというその原因の一つに適切な実証実験が行われなかったことが挙げられます。20年ほど前に、インドネシアでは熱帯泥炭湿地

林を伐開して稲作導入をめざす国家的プロジェクトが実施されました。しかし、開発後に稲作に不適合な土壌であることが判明し、荒廃し乾燥した泥炭地のみが残されました。このために野焼きにより火が入りやすくなり泥炭火災が引き起こされています。当時、開発に対するパブリックアクセプトランスは得られていたわけですが、しっかりとした実証実験が行われていなかったために今日の大規模なヘイズを導いているのです。

この一例に限らず、新しい技術や政策の導入において、真つ当な実証実験やリスク評価がなされていないにもかかわらずパブリックアクセプトランスが得られて（得られたとして）世の中に導入されて、その後、大きな環境問題や社会問題に発展した事例は溢れています。いずれにせよ、パブリックアクセプトランスよりも、それが得られる過程で真つ当な実証実験が行われていたかが重要です。これからは、我々一般市民も積極的に実証実験に参加していくことが重要になるのではないのでしょうか。

実証実験の重要性

Relay Essay
リレーエッセイ

環境学研究系
環境システム学専攻 教授

戸野倉 賢一

